

巻頭言

日本語の本と読書



大沢英一

図書館の利用者の減少が言われはじめて久しい。その原因として多くの事が指摘されている。教官からは「若者の活字離れが進んでいる」に始まって「学生が勉強しなくなった」まで。学生諸君からは

「図書館に入るときカバンを持ち込めないなど規則が煩わしい」、「読みたい本がない」など。図書委員会では、親しみやすい図書館を目指して努力しており、ブックディテクションシステムの導入なども学生諸君に受け入れられていくものと期待している。

また後者についても、図書予算をできるだけ効果的に利用するにはどのような本を購入すべきかということについても多くの学生諸君の意見を参考にして決めるようにしている。しかし、数多くある専門、一般科目分野についての学生諸君の要求をすべて満足させるには限られた予算では困難がある。

話は変わるが、本校の図書館で利用される本は語学を除けばほとんどが日本語で書かれた本である。この日本語について、芳しからざる評価がなされる。特に漢語については同音異義語が多いなどと悪評たらたらである。しかし、世の中一方的に欠点のみという事柄は少なく、欠点が逆に長所に変わるというのが普通である。漢語は字を見ると表現している内容がだいたい理解

できるという特長を有する。英語に於いては専門用語の多くはラテン語あるいはギリシャ語を拝借して作られている。「aquatic animal」、「hydrolysis」という語はaquaがラテン語の、hydroがギリシャ語の水の意であることを理解していないと、それぞれ「水生動物」、「加水分解」であるとはわからない。一方、漢語は初めて見る用語であってもその構成字を見ればその語が意味することはおおよそ理解できる。

初めて学習する分野について書かれた本を読むときの一番の困難は、用語の意味がわからないことであろう。このとき漢語で作られた用語は比較的容易にその意味を一応は理解できる。純粋な専門書ではさすがに誰でも読めるという訳にはいかないが、例えば「いのちと暮しのケミストリー」、「化学を楽しくする5分間」などは比較的簡単な語を用いて書かれており、工業化学科の学生だけでなく他科の学生諸君でも楽しみながら読むことが出来る本である。機械、電気、土木またその他の分野でも、多くの人に易しく、かつ楽しく読める「読み物」が図書館内に存在する。専門書だけでなくこのような「読み物」まで読書の対象としてみるならば、本がない、少ないと感じている図書館にも多くの蔵書があると再認識させられるものとなる。一度図書館に入って、今までは自分には関係ないと考えていた書架の部分にも一読してみようと思う本があることを再認識してみませんか。

(工業化学科教官)

目次

巻頭言	大沢英一	1
随想	阿部吉弘 高野克宏	2
購入雑誌についてのアンケート		4

図書館改修計画のあらまし(3)	5
新着図書案内	6
臨時閉館のお知らせ	11

変身願望 (・・・とかかわる)

阿部吉弘

本屋さんには、漫画がいっぱいある。教室にもあるし、授業中に読んでいる子もいる。取り上げてバラッと見るが、たいてい返してしまふ。絵が面白くないと読む気にならない。ストーリーを読ませたり、全体に漂う雰囲気を作るようなのは、どうも敬遠してしまう。劇画「三国志」が売れたなんて信じられない。

本と違って、漫画や絵画の良いのは、伝達手段が直接で、デジタルなところだ。「三国志」は劇画化することで、確かにわかりやすくなるが、そのことは、漫画としての面白さとは無縁だ。ストーリー自体が、デジタルだという長所に反している。

文章を読む時は、「ことば」という媒体を通して考え、想像を働かせるので、時間と労力がかかる。経験や他人の考えが思考回路に入りこんでいるから、本当に自分で考えているのかどうかは、かなり微妙な問題になる。「ことば」自体につきまとう歴史も必然的に入りこみ、それからは絶対に逃れられない。

それでもイメージの豊富さはビジュアルな伝達とは比較にならない。どのくらい絵が強烈に脳細胞に作用するかは、初めて「ゲルニカ」の写真を見た幼稚園児が、「オソロシイえだね」と言った時、身にしみた。直接・強烈だから、イメージが固定されがちだ。

小説を読む時に、全体のすじにはあまり頓着しない。長編になると、途中で最初の方がわからなくなることもある。高校の時、毎日30分が読書の時間だったせいかもしれない。本は、あれこれ考える材料を提供してくれる。作者の訴えたいことは何か一なんて考えない。浮かんできた問題を考える、観念を鍛える。中学までの国語の授業は本当につまらなかつた。忌まわしい段落分けに主題という決まり文句。

評論などを読む時、書いてあることを理解するだけではつまらない。作者の論理構造をスパイし、反論しようと試みる。批判することは、自分の中のそういった部分を攻撃することだ。

本に限らない。音楽一特に rock はそう

だ。ひとの意見や主張を聞くのではなく、自分が主張し、自分自身を攻撃して変わっていく。自分のことだから面白い。クラシックだって、聞く前と後で自分が変化していなければ、カラオケやっているのと同じだ。ストレスのはけ口。

きっと何だってそうだ。かかわることによって、意志=世界=可能性が広がる。本を読んできて、一番良かったと思うのは、ドミトリー・カラマゾフや、ジャック・チボーのような、めっちゃくちゃにエネルギーな人間と出会ったこと。そのような人物が創られるということは、そのような人間になれるということ。 - 突然反省。何とも遠く離れてしまった。

若い人は、どんどん変わっていきける。「自分」が美しく変わっていくことだけが、世界を良くしていく。ポロポロになってきたけれど、全然変われないわけではない。心の底の方ではまだあきらめていない。

Abnormal は寂しく福島を去ります。皆さん、やさしくしてくれてありがとう。

(注)ドミトリー・カラマゾフは、ドストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」に、ジャック・チボーは、デュガールの「チボー家の人々」に出てくる。

☆ 阿部吉弘先生は、10月1日付けて、沼津工業高等専門学校へご転勤になりました。先生の、今後のご活躍を心からお祈りしましょう。(編集部)

失われし神を求めて

高野克宏

今年の夏は、異常に暑かった。気温が高かったことは勿論であるが、そればかりではなく、メンタルな要素が多分に働いていたように思う。私にとってそのメンタルな要素とは、毎日毎日、繰り返してテレビから流されるイランのクウェート侵攻のニュースであった。今回の中東での出来事は、政治的、軍事的事情を別にして考えれば、イスラム教世界の価値観とキリスト教世界の価値観との対立という構図が見て取れるような気が、私にはするのである。そして、「神」を持たぬ奇妙な民族とこれまでにしばしば言われてきた日本が、

その間に挟まって右往左往する姿は、何か象徴的なものを感じずにはいられない。

我々日本人は、本当に「神」を、或は宗教を持たないのであろうか。いや、そんなことはない。困ったときには誰でも、「神様仏様お願いします」と心の中で唱えるではないか。そこで、私はさっそく図書館の書庫に潜り、日本の「神と仏」について調べてみた。

そこで見つけた「日本民族文化体系4 神と仏」（小学館）には、次のように書いてある。即ち、神については「善神であっても悪神に化することもあり得る……悪神もまた善神に転化する可能性」があるといい、更には「人の祭祀が不足すると、神は妖怪に変貌する」というのである。また仏については、これが神とほぼ同等に捉えられていたとしながらも、日常意識の次元では「ホトケ＝死者」のイメージが強いと指摘しており、別な本（定方晟著「仏教に見る世界観」レグルス文庫、第三文明社）によると仏教は無神論につながる宗教となってしまうらしい。つまり、古くからの日本の神々は、西洋の神々のように唯一絶対のものではなく、時には人間に害を及ぼすこともあるというのであり、仏にいたっては、一見神のようであるが実はだいたい性質がちがっているようなのだ。これでは、キリスト教やイスラム教の神々からはだいたい遠いではないか。では、日本人は今まで、何を生活上の倫理基準として生きてきたのだろうか。この世には、神も仏もないのか。

そこで思い当たるのは、業と輪廻の思想である。子供の頃、「悪いことをすると罰が当たるぞ」とか、「死んでから地獄に落ちるぞ」とかと言って脅された記憶は誰にでもあるだろう。こうした言い方が、業と輪廻の考えに由来するのは明らかである。

「業」とはインド語のkarman（カルマン）の訳語であり、これは人間の行為に伴って生じる、或る目に見えない潜在的力を意味する。カルマンは、我々が何らかの行為を為すと必ずそれに付随して生まれ、知らず知らずのうちに、それぞれの行為の善悪に応じた結果をもたらすと考えられている（因果応報）。即ち、善い行いには楽しい結果が（善因楽果）、悪い行いには苦しみを伴った結果が（悪因苦果）、やがてその行為をした者に訪れるのである。そして、善い行為を積み重ねると、死後極楽に生まれることができ、悪い行為ばかりをしていると地獄に落ちて、永久に苦しみ

に満ちた「輪廻」の循環を逃れられないことになるのだ。

ところで、この「業」の法則の特徴は、これが全宇宙を支配する不変の原理と考えられていたという点にある。何人もこの法則を曲げることはできず、神や仏ですらこれに従わなくてはならないのである。かつて人々は、誰も見ていない所で、例え仏の目すらごまかしたとしても、この法則によってやて報いを受けるであろうことを恐れた。そして、この恐れが我々日本人の生活を律していた。しかし今では、これは非科学的考えとして、誰も省みなくなってしまうている。日本人は、生活上の指針の一つを捨て去ったのである。

我々日本人が、キリスト教やイスラム教で言うところの、所謂「神」を持たないのは確かであろう。これに対して、キリスト教徒やイスラム教徒は、毎日の生活のあらゆる場面で神と対話しつつ生きており、全ての行動について神の御心に叶うべく己を省みているのである。そうした人々から見れば、「アナタハカミヲシンジマスカ？」と道端で尋ねて、「そんなもん信じねえよ」と事も無げに答える人種は、いかにも不可思議で信用ならざる存在かも知れぬ。

いや、もしかするとそんなことではないのかも知れない。つい百年ほど前まで信じ恐れていた、神や仏、或は業や輪廻といった考えを、何のためらいもなく捨て去った事の方が、彼らにとっては余程奇妙なのかも知れない。我々は今、一人一人が新しい価値観を、しかも世界に通用する価値観を身につけなくてはならない時に来ているようだ。

最後に、業と輪廻、或は仏教における世界観について書かれた参考文献を紹介しておく。

定方晟著「須弥山と極楽」、講談社現代新書

定方晟著「インド宇宙誌」、春秋社。

岩田慶治＋杉浦康平編「アジアの宇宙観」
講談社。

<蛇足>

本当は、この文章はもっと違った形でと、小林伸吉先生から依頼されていたのであったが、それからは余りにかけ離れた形になってしまった。「ビブリア」にふさわしいかどうかどうも怪しいが、世にあまたある教師の多くが持っているであろう後ろめたさを、私も感じつつ、この様な駄文でお茶を濁そうという魂胆である。

購入雑誌についてのアンケート

新しい雑誌をばらばらめくことは読書とは違った楽しみがある。そして読書へのヒントを沢山得ることができる。

現在、雑誌コーナーには 74 種類の雑誌が定期的に購入され並べられている。それらがどの程度読まれているか等についてのアンケートを全学生を対象に実施した。回収された 600 枚（回収率 75 %）の集計は以下のとおりである。

1. 良く読まれている雑誌（ときどき読むを含め 60 以上）

誌名	毎号読む	ときどき読む
1 いわき	149	261
2 スクリーン	81	240
3 モーターファン	51	99
4 ニュートン	43	158
5 キネマ旬報	37	139
6 テニスマガジン	34	55
7 アサヒカメラ	27	104
8 ステレオ	26	95
9 サッカーマガジン	25	84
10 月刊バスケットボール	22	62
11 HiVi	20	57
12 高2v進学コース	17	73
13 高1v高校コース	17	66
14 特選街	14	78
15 月刊アスキー	14	49
16 サイエンス	5	59

2. あまり読まれていない雑誌（ときどき読むを含め 20 未満） 順不同

世界	太陽
地理	芸術新潮
美術手帖	文芸広場
群像	エネルギーレビュー
基礎ドイツ語	技術と人間
数理科学	数学セミナー
MOL	化学と生物
化学	化学と薬学の教室
金属	応用機械工学

工業英語	トラ技コンピュータ
新電気	OHM
電子技術	エレクトロクワイフ
化学と工業	道路建設

グラビア写真が多く気軽に読める雑誌、映画自動車、スポーツ、音楽等の趣味の分野の雑誌が比較的多く読まれている。

一方、毎号読む学生が数名ずついるものの、あまり読まれていない雑誌はじっくり腰を据えて読まないという理解しにくいものが多い。

この中には専門分野の雑誌が数多く含まれている。主な対象が各専門学科高学年であることも一因であるが、工学を学ぶものにとって、学問を深めることはもちろん各分野の最新情報を知ることが大事なことであるから、専門雑誌にはぜひもっと目を通したい。

3. 購入希望雑誌（5 件以上）

モーターサイクリスト
ヤングマシン
ヤングオート
CDデータ
FM Station
ムー
ビデオデータ
フライデー
MEN'S NONNO
HOTDOG PRESS

200 種類以上の希望雑誌のうち、マンガは除いてある。上記を含め同類の多いものはバイク、自動車関係、ロック音楽関係マイコン関係、カメラ関係、野球関係等である。

見る雑誌がほとんどで、読む雑誌はきわめて少ない。

図書委員会では、これらの結果を検討し、来年度の購入雑誌を選定したいと思っている
(編集部)

図書館改修計画の

あらまし その3



図書館長 小林伸吉

夏休み中に、book detection system が据え付けられ、現在書庫にある約4万冊の本に、磁気テープが張り付けられた。関係方面の

ご理解とご協力で、予定よりかなり早く、閲覧室へのカバン等の持込みが可能となった。前号で説明した通り、この機械は、貸し出し手続きを終えていない図書に対してブザーで反応するものである。高専の学生ならばその原理は理解できるであろうし、機械の裏をかくことも簡単だろう。しかし、それから先はモラルの問題である。これからも多少の紛失図書はあるにしても、学生の良識を信じて図書館運営をしてゆこうと、9月からは私物の持込みを認めている。

しかし、本当に学生を信用してよいものだろうかという疑問は繰り返し頭をもたげてくる。夏休み明けの3日間にビデオテープが約20本盗まれた。AVコーナーにタバコを吸った跡が見つかった。AVコーナーの改修を始めようとしている矢先だけに、関係者をかなりがっかりさせている。今後とも、このような不祥事が起こるならば、AVコーナーを、より利用しにくいかたちで管理せざるを得なくなる。一部不心得者の猛省を促したい。

そのAVコーナーは12月始めに完成予定である。ビデオブースが6台設置され、ビデオ装置、ディスプレイ、ヘッドフォンすべてが新品となる。ただし、当初考えていたレーザーディスク、コンパクトディスクの装置は、そのソフ

ト購入のための予算が当分の間見込めないため、今回は見送ることとなった。従って、このコーナーの名称も「ビデオコーナー」とした方が適当だろう。しかし、ビデオソフトを購入する予算があるわけではない。もっぱらテレビ放送の録画を、内輪で楽しむという格好で、著作権の問題を回避しながら、学生諸君に利用してもらうことになる。従って、館外貸し出しをする可能性は今後ともありません。

その代わり、できるだけ多くの番組を幅広く録画・編集するためのビデオデッキを別に購入し、この11月から始まる衛星放送「J S B」にも対応したいと考えている。ただし、編集・整理等の仕事は現在のスタッフではとても手に負えないので、とうぜん受益者負担、学生図書委員諸君の協力を期待したい。

ところで、中国のテレビ放送は日本の機械では受信できないということをご存じだろうか。統一前の東西両ドイツではシステムが少し違うため、東のカラー放送は、西では白黒でしか受信できなかった。世界には5つのテレビ送受信システムがあり、それぞれ別の設備が必要なのであるが、今回、すべてのシステムに対応する機種を2台購入し、異システム間のダビングができるようにする。つまり、マレーシア、フィリピン、中国あるいはヨーロッパのビデオを日本式のTNS Tに変換あるいはその逆ができるようになる。留学生は故国から送られて来るビデオを日本で見ることができるし、日本で録画したものを家族に楽しんでもらうこともできるようになる。これは、しかし、留学生の便宜のためだけではない。この国際化の時代、これからは授業や趣味のレベルでも世界中の映像資料が利用できるということである。特別のアンテナを設置すればソ連や中国、アメリカのテレビ番組をダイレクトに見ることも可能となる。(ただし、アメリカのインテルサットの電波を受けるために必要なアンテナ本体の値段は百数十万)。すぐには無理なようである。

新着図書案内

(9 月末現在)

総記

学問の創造	福井謙一著	佼成出版社
ブックページ 本の年鑑	1990	同刊行会
世界不思議百科	フィン・ウィルソン他	青土社
東洋文庫	和漢三才図会	平凡社
	洛陽伽藍記	
	詩経国風	
	人倫訓蒙図彙	
	琴棋書画	
岩波講座転換期における人間	別冊 教育の課題	岩波書店
福島	の戊辰戦争	歴史春秋社
いわき市史	別巻 常磐炭田史	いわき市
いわき地学会	夏井地区総合調査報告	いわき地域学会
相馬今昔	松岡重信著	相馬郷土研究会
磐越西線	歴史春秋社編	歴史春秋社
ふくしまの幽霊	山崎義人他編	歴史春秋社

哲学

学問への旅	森本哲郎著	佼成出版社
岩波講座東洋思想	13 中国宗教思想	岩波書店

歴史

ヨーロッパの1930年代	斎藤孝著	岩波書店
東アジアの中の日本歴史	13 天皇と中国皇帝	六興出版
昭和二万日の全記録	11. 12. 13	講談社
「文芸春秋」に見る昭和史	1~3	文芸春秋
図説西郷隆盛と大久保利通	芳即正他	河出書房新社
学問の探検	江上波夫著	佼成出版社
学問のすすめ	梅原猛著	佼成出版社
角川地名大辞典	20	角川書店
日本歴史地名大系	3	平凡社

社会科学

「No」と言える日本	盛田昭夫他著	光文社
おはなしOR	森村英典著	日本規格協会
地球白書 '88-'89	ブライアン編著	ダイヤモンド社
現代殺人百科	シーマン著	青土社
ハイパーメディアと教育革命		アスキー
日本人の一生	牧田茂著	講談社
昔あったんだっち	佐藤孝徳著	いわき地域学会

自然科学

計算機数学	町田元他著	森北出版
おはなしファジィ	西田俊夫著	日本規格協会
ファジィ集合	シューマッカー著	啓学出版
基礎数学演習	作花一志著	共立出版
物理学 one point	29 原子と原子核	共立出版
摩擦のおはなし	田中久一郎著	日本規格協会

表面・高分子と静電気	村田雄司著	共立出版
アモルファスな話	米沢富美子著	岩波書店
高分子電気物性	金丸親著	共立出版
図説・電流とは何か	後藤尚久著	講談社
図説化学の基礎	神谷功他著	岩波書店
化学の法則45話	北原文雄他著	講談社
基礎化学	Siebring他著	東京化学同人
分子の世界	分子科学研究振興会編	化学同人
わかりやすい物理化学	関崎正夫著	共立出版
計算化学ガイドブック	Clark著	丸善
量子化学の基礎	平野康一著	共立出版
分子の中の電子の流れ	中川直哉著	講談社
量子化学のすすめ	西本吉助著	化学同人
固体表面の触媒作用	戸谷富之他編	共立出版
L B 膜の分子デザイン	入山啓治著	〃
入門高分子特性解析	高分子学会編	〃
高分子表面の基礎と応用	筏義人編	化学同人
機器分析のためのコンピュータ入門	南茂夫他著	講談社
入門クロマトグラフィー	Glitter他著	東京化学同人
地球温暖化の時代	シュナイガー著	ダイヤモンド社
土木技術者のための岩石・岩盤図鑑		鹿島出版会
基礎生物学	中村運著	培風館
生化学	ユーン他著	東京化学同人
岩波講座分子生物科学	4 細胞の増え方	岩波書店
	5, 6 情報の伝達と物質の動き	
	7 エネルギーの生産と運動	
生化学	石橋貞彦他著	丸善

工 学

Cによる有限要素法のアロプログラミング	黒木健実他著	森北出版
温度のおはなし	三井清人著	日本規格協会
計測のおはなし	矢野宏著	〃
構造振動解析	西岡隆著	培風館
熱エネルギーのおはなし	高田誠二著	日本規格協会
構造安定論	伊藤文人著	技報堂出版
複合材料のおはなし	小野昌孝著	日本規格協会
硬さのおはなし	寺沢正男著	日本規格協会
自動制御論	高橋安人他著	オーム社
日本の技術100年	6 建築・土木	筑摩書房
おはなしI E	古川光著	日本規格協会
おはなしV E	土屋他裕著	日本規格協会
土木への誘い	シビル工学研究会編	日本理工出版会
土木工学とパソコン応用	法政大学工学部大地研究室編	オーム社
土木和英辞典	小林康昭他著	近代図書
建築・土木の雑学事典	大浜一之著	日本実業出版社
新編土木工学ポケットブック		オーム社
新体系土木工学	88 上水道	技報堂出版
岩石破壊力学とその応用	日本機械学会編	コロナ社
地質工学用語事典	Somerville他著	オーム社
切手にみる世界の橋	佐藤健著	理工図書

BASICによる橋梁工学	当麻庄司著	共立出版
パソコンによる橋のCAD	合成桁編 島田静雄他著	山海堂
都市トンネルにおけるNATM	桜井春輔他著	鹿島出版会
絵で見るダムのできるまで 1	中村靖治著	山海堂
浄水の技術	丹保憲仁他著	技報堂出版
水質工学 基礎編	合田健著	丸善
水道とトリハロメタン	丹保憲仁編著	技報堂出版
化学環境概論	明島高司他著	共立出版
NHK地球汚染 1	大気に異変が起きている	日本放送出版協会
2	海はひそやかに警告する	
自然保護辞典 1	山と森林	緑風出版
鋼構造用語辞典	日本鋼構造協会編	技報堂出版
構造物の免振・防振・制振	武田寿一編	〃
ばねのおはなし	小玉正雄著	日本規格協会
ベアリングのおはなし	綿林英一他編	〃
ポンプ	佐藤良男他著	省エネルギーセンター
電力制御回路せつけいノウハウ	在田保信他著	CQ出版
解析ノイズ・メカニズム	岡村迪夫著	〃
ノイズによる誤動作と対策	酒井洋他著	日刊工業新聞社
絵ときデジタル信号処理入門	浅川毅他著	オーム社
A-D変換を使いこなす	竹本晃他著	CQ出版
磁気記録最新技術と装置・機器	同編集委員会	総合技術出版
光ディスクのおはなし	三橋慶喜編	日本規格協会
分子機能材料	水島公一他編	共立出版
導電性有機薄膜の機能と設計	山下和男他著	共立出版
計測のための電子回路 上下巻	ジェームズ他著	現代工学社
電子回路 1冊編	尾崎弘他著	共立出版
絵ときデジタル回路の計算	飯高成男他編	オーム社
デジタル回路入門	河崎隆一他著	コロナ社
デジタル回路設計ノウハウ	中野正次著	CQ出版
図解シーケンスデジタル回路の考え方・読み方	大浜庄司著	東京電機大学出版局
センサ回路と応用	吉田裕道他著	近代図書
やさしいデジタル回路の基礎と実験	遠峰達郎他著	電子技術出版
簡明電子回路入門	矢部初男著	槇書店
OPアンプIC活用ノウハウ	玉村俊雄著	CQ出版
走査電子顕微鏡の基礎と応用	日本電子顕微鏡学会関東支部編	共立出版
アモルファス薄膜	馬來国 著	〃
デジタルICの設計	湯山俊夫著	CQ出版
論理回路シュミレーション	阿部英志著	〃
新しい計算機アーキテクチャ	飯塚肇編	丸善
バイオコンピュータ	神沼二真他編	紀伊国屋書店
電子計算機基礎論	手塚慶一編著	昭晃堂
フォールトレラントシステム論	当麻喜弘編著	電子情報通信学会
電気・電子学生のための情報工学実験	伊藤誠著	丸善
ASICの論理回路設計法	小林芳直著	CQ出版
PLDの論理回路設計法	小林芳直著	CQ出版
速解論理回路	宮田武雄著	コロナ社
基礎電子計算機	美咲隆吉他著	学献社
電子計算機演習	高橋義造著	朝倉書店

論理回路理論	山田輝彦著	森北出版
フロッピーディスクのおはなし	大石完一他著	日本規格協会
バーコードのおはなし	流通開発システムセンター編	〃
PC-9800シリーズテクニカルデータブック		アスキー
便利な短いプログラム	98版	ラッセル社
第2種情報処理試験	90年版	昭晃堂
情報ネットワークのおはなし	平野達郎他著	日本規格協会
岩波情報科学辞典	長尾真他著	岩波書店
ニューラルネットワークコレクション	今井兼範著	共立出版
楽々LATEX	野寺隆志著	共立出版
パソコン端末利用マニュアル	西村恕彦編著	オーム社
知的制御システム	竹垣盛一他著	海文堂
計上記憶合金のおはなし	根岸朗著	日本規格協会
アモルファス金属のおはなし	増本健著	日本規格協会
鋼のおはなし	大和久重雄著	〃
貴金属のおはなし	田中金属工業株式会社編	〃
鋳物のおはなし	加山延太郎著	〃
熱処理のおはなし	大和久重雄著	〃
無機工業化学	安藤淳平他著	東京化学同人
現代化学工業	今井寅二郎他著	三共出版
無機工業化学	塩川二郎編	化学同人
化学工学概論	大竹伝雄著	丸善
化学工学入門	岡崎達也編	三共出版
分離膜のおはなし	大矢晴彦著	日本規格協会
セラミックスの強度と破壊	Davidge著	共立出版
ファインセラミックスのおはなし	奥田博著	日本規格協会
セラミックスの化学	柳田博明編著	丸善
入門高分子材料	高分子学会編	共立出版
入門高分子材料設計	高分子学会編	〃
塗料のおはなし	植木憲二著	日本規格協会
接着のおはなし	永田宏二著	〃

産 業

単位のおはなし	統	小泉袈裟勝著	日本規格協会
パソコンで学ぶ土の物理学		キャンベル著	鹿島出版会

芸 術

図記号のおはなし		村越愛策著	日本規格協会
印刷のおはなし		第日本印刷(株)編	〃
ジャズを聴く		ジュリー・コカ著	音楽之友社
ジャズ入門		エドワード・リー著	〃
ハロー・アイ・ラブ・ユー		鳥井賀句著	立風書房
ジャズ		大和明著	音楽之友社
リリー・マルレーン		ラ・アンデルセン著	中央公論社
ビルボード・ナンバー1・ヒット		ブロンソ著	音楽之友社
トットチャンネル		黒柳徹子著	新潮社
映画千一夜		淀川長治他著	中央公論社
「文芸春秋」にみるスポーツ昭和史	1-3		文芸春秋
F1地上の夢		海老沢泰久著	朝日新聞社
Honda F1 1000馬力のエクスタシー			集英社

バイク伝説の神様たち 米山義男著
原色茶道大辞典

勁文社
淡交社

語学

専門語の諸問題 国立国語研究所著
論文のレトリック 沢田昭夫著
実用英語検定準1級全問題集 90年度用

秀英出版
講談社
日本英語教育協会

文学

孔子 井上靖著
塩狩峠 三浦綾子著
道ありき 青春編 三浦綾子著
メディチ家殺人事件 塩野七生著
白河夜船 吉本ばなな著
落第坊主の履歴書 遠藤周作著
トットの欠落帖 黒柳徹子著
狼たちへの伝言 落合信彦著
魔法の杖 俵万智著
おくのほそ道 田辺聖子著
源氏物語 瀬戸内寂聴著
枕草子 田中澄江著
万葉集 大庭みな子著
ビートルズ詩集
レイモンド・チャンドラーの生涯 マクシェイン著
レイモンド・チャンドラー語る
ビリー・ジョエル詩集
アードル・スプリング物語 ファンター他著
フィリップ・マーロウの事件 1,2
明日があるなら 上下巻 シェルダン作
鏡のなかの鏡 ミハエル・エンデ著

新潮社
新潮社
新潮社
朝日新聞社
福武書店
日本経済新聞社
新潮社
小学館
河出書房新社
講談社
〃
〃
〃
シンコー・ミュージック
早川書房
〃
シンコー・ミュージック
早川書房
早川書房
アカデミー出版
岩波書店



1 2 月 は 図 書 館 を 閉 館 し ま す

特別貸し出しは 1 1 月 3 0 日 まで 受付

1 人 6 冊 返却日：平成 3 年 1 月 1 7 日（木）

図書館閲覧室の空調施設工事のため、12月1日より平成3年1月10日まで図書館を臨時閉館します。中間試験のある大切な時期ですが、予算・工期その他諸々の事情からこの時期にしか工事ができません。夏涼しく、冬暖かい快適な読書環境を作るため、ご協力をお願いします。

この間、閲覧室は全面的に立ち入り禁止となりますので、冬季休業中の特別貸し出しを11月30日（金）まで行います。図書閲覧票1枚につき2冊借りられます。従って、1人6冊までの特別貸し出しとします。返却日は平成3年1月17日（木）です。

図書館改修計画のハード面はこの工事をもって一応終了します。1月には閲覧室のAVコーナーも新装なり、視聴覚教室のビデオも100インチの大画面に変わります。図書データのインプット、閲覧票のバーコード化といった事務処理から、開館時間の延長、図書館の一般解放等々やるべきこと、やりたいことが山積しています。しかし、主体はあくまでも学生諸君です。21世紀の高専図書館のあるべき姿を考えておいて下さい。来年早々、図書館サービスについてアンケートを実施する予定です。

（ 図 書 委 員 会 ）

編 集 後 記

☆ 本校でも留学生を迎えるなど、“国際化”が身近に感じられるようになってきている現在、辛抱強く本を読むことによって、世界とのつながりを考えたり、思考力を鍛えて表現力を豊かにすることなどがますます大切になってきているが、何人かの学生に図書館について聞いてみると「難しい本が多い」、そして読書については「あまり好きでない」という冷たい返答が圧倒的である。読書好きになってもらえそうな面白い本をたくさんそろえる……という訳にはいかないところに本質的な難しさがありそうです。

☆ ビブリアへの投稿はいつでも歓迎します。閲覧室の投書箱へ！

（ 佐 藤 恭 輔 ）